観光学科３年生の「カンチャナブリ模擬ツアー」実践報告

大野 直子

1. はじめに

ラチャパット大学は、全国に41校あり、カンチャナブリ・ラチャパット大学はそのうちの１つである。学生数約6000人、教員数約250名、５学部の国立総合大学である。

当校の日本語教育は、1992 年度の１学期のみの選択科目としての日本語コースから始まった。翌年、1993年度より観光学科の学生に対する選択科目としての日本語コースが４学期のコースで開始され、1994年度より６学期のコースとなり、現在に至っている。また、1996年度後期より、英語主専攻の学生に対する日本語副専攻コースを開始したが、2002 年度後期に廃止され、翌年2003年度より日本語主専攻コースが始まった。さらに、教育学部の学生を対象とした選択必修科目としての日本語コースが、2004年度より開始された。他に、全学部対象の自由選択科目としての日本語コースもある。（これは毎年ではなく学生の希望に合わせて開講される。）現在、約 200名の学生が日本語を学習している。

当校の観光学科の学生（専門は観光事業、ホテル、レストランの３つ）にとっての日本語は、選択科目であるが、個人で選択することができず、日本語に興味のない学生が、日本語を履修する場合が多い。また、６学期のコース終了時においても、学生の日本語レベルは初級前半レベルであり、卒業後に日本語を使って仕事をすることが困難である。これらの理由から、このコースの到達レベルの目標設定が難しい、学生の日本語学習に対する動機が低いなどが問題となってきた。その問題解決のための試行錯誤の中、「カンチャナブリ模擬ツアー（以下、「模擬ツアー」）」が、1994年度より開始された。これは、タイ在住の日本人に観光客役になっていただき、学生がカンチャナブリを案内するという活動である。これを日本語コースの最後に企画することで、学生の学習動機を高めるとともに、日本人と話せたという達成感や自信をつけさせることができるのではないかと始められた試みである。カンチャナブリは、バンコクから約２時間のところにあり、観光地としてもよく知られているため、日本人の協力を得やすいということもあり、1994年度より少しずつ改善されながら行われ続け、今日に至っている。筆者が担当した2003年度、2004年度はその第10回目、第11回目にあたる。

本稿は、2003年度の反省を踏まえ改善した2004年度「模擬ツアー」の実践報告を中心にまとめ、さらに2004年度の反省点と改善案についての考えをまとめたものである。

2. 2003年度「模擬ツアー」の反省より

学生、日本人参加者の両者から複数回答のあった否定的反省をもとに、2004年度のツアーの企

画などの改善を試みた。

2.1　学生、日本人協力者の声

学生、日本人協力者の両方から出ていた意見は、「暗記部分はよく出来ていたが、日常会話になると不十分」というものが圧倒的に多かった。また、「ツアー予約のタスク練習が不十分」という声も多く挙がっていた。また、これは企画に関するものだが、「戦争に関係のある場所だけでなく、自然の観光地も案内したい／してほしい」という意見も多かった。

2.2　2004年度「模擬ツアー」に向けて

2003年度のツアーの反省をもとに、2004年度の「模擬ツアー」に向けて教科書の改訂、模擬ツアーの内容の見直しという２点を行った。

2.2.1　教科書の改訂

学生から、ホテル場面も時間軸に沿ったほうがいいという意見が複数出たので、まずホテルの提出課を時間軸にあわせた。(2003年度に使用した教科書では、ホテル場面は10課であった。)また、第5課と第11課は、会話本文を新たに書き直した。具体的には、第5課は、レストランでの会話を、ツアーで行くクーポン制レストランでの会話に、第11課は、A／B２つの日帰りコースを紹介するという内容を、１つのみの紹介に改めた。以下に、改訂した教科書の目次を示す。

表１：教科書『観光日本語』目次　2004年度版

課	目次
	敬語
1	お客様を迎える
2	バスの中
3	戦争博物館で
4	バスの中⇒クウェー川鉄橋
5	クーポン制レストランで
6	クウェー川鉄橋
7	クウェー川鉄橋⇒学校
8	チェック・イン／客室へ案内
9	ホテルを出発する
10	連合軍共同墓地⇒見送り
11	日帰りツアーの予約 （ツアーを１つ紹介）

また、全課にわたって誤字脱字の訂正、重複している語彙の削除を行った。提出文型、表現はそのまま使用した。

2.2.2 模擬ツアーの内容の見直し

2003年度の反省では、学生、日本人協力者ともに、スケジュールの時間配分については、おおむね好評であった。しかし、観光地、日本人協力者に関する意見が複数あったので、この２点について見直した。

（１）観光地

「自然を楽しむ観光地も取り入れて欲しい」という意見が学生、日本人協力者の両者からあった。これは、当ツアーで訪れる観光地である「戦争博物館」、「クウェー川鉄橋」、「連合軍共同墓地」の３ヶ所は、全て戦争に関係のある場所ばかりであるため、日本人にとっては観光を楽しみ難い、また学生にとっては説明の言葉が難しすぎるという気持ちから出た意見だと考えられる。そこで、滝などの自然をコースに入れることを検討してみたが、自然のある観光地は遠いため、移動時間が多くとられること、またこのツアーは純粋な観光ツアーではなく、学生の日本語の練習のための活動であることという理由から、比較的時間をかけずに短時間で移動できる2003年度で訪れた観光地のまま、2004年度もツアーを行うことになった。

（２）日本人協力者

「日本人協力者に求められている役割が曖昧であるので、学生の評価が難しい」というような意見が複数あった。このツアーは、学生がガイドや添乗員役、日本人協力者が観光客役という設定で行う。しかし、この設定により、日本人協力者は、このツアーの当初の目的である学生の日本語での活動というよりも、観光業（ガイドとしてのマナーや、観光地に対する知識など）という点を重視してしまいがちであったのである。もちろん、その点もガイドと観光客という設定にしてある以上重要ではあるが、このツアーの目的からは少しそれてしまう。この設定にした理由は、学生の専門に関することなので学生の興味や関心を引きやすく、学習意欲を高めやすいからである。その点について、2003 年度では、説明が不十分であったかもしれない。そこで、2004年度では、このツアーの目的は、観光ではなく、あくまで学生の日本語学習のための活動であることを、事前のツアーの案内に明記するとともに、１日目のツアー終了後に行う反省会でもその点を口頭で説明し、日本人協力者の理解を求めることにした。

また、2003年度以前は、日本人協力者は日本人であれば誰でも良しとしていたが、学生から日本人協力者の評価の公平さ、信頼性に関する不安や懸念を表す意見が出たことを受け、日本人協力者を誰に依頼するかという点を検討することにした。様々な観点から検討した結果、日本語教師が一番適しているのではないかと考えた。その理由は、一般日本人よりも日本語教師の方が日頃から学生を評価しているので評価に慣れているという点、また日本語学習者と話すことに慣れているので、学生の話す日本語が少々分かり難くても伝達内容を理解できるという２点である。

また、学生のツアーまでの到達レベル、日本人との発話に慣れていないことなども考慮すると、やはり日本語教師が、日本人協力者として一番適当であると判断した。そこで、今回の日本人協力者は全て日本語教師に依頼することにした。

3. 2004年度「カンチャナブリ模擬ツアー」に至るまで

3.1 「模擬ツアー」までの授業

「模擬ツアー」に至るまでの授業において、2004年度で変更、改善したことをまとめる。

3.1.1 実施科目の変更

2002年度入学生より、カリキュラムが変更され、1年生後期から4年生前期まで日本語を学習することになった。しかし、科目は変更されていない。

表2：カンチャナブリ・ラチャパット大学観光学科対象の日本語開講科目と開講時期(2002 年度以降)

	1年次	2年次	3年次	4年次
前期		基礎日本語2	日本語会話2	観光日本語2
後期	基礎日本語1	日本語会話1	観光日本語1	

そこで、「模擬ツアー」を、今まで通り「観光日本語2」で行うかどうかを検討することになった。検討したのは、以下の（1）～（4）の項目についてである。

（1）学生

学生は4年生になると「実習準備」などで忙しくなり、ツアーの準備が疎かになりかねないことが懸念される。また、今までは「模擬ツアー」をして学生の日本語学習に対する動機が高まっても、日本語学習が終わってしまうことにより日本語を勉強する機会を学生は持てなかった。学生から「もう少し続けて日本語を勉強したい」という意見が出た場合は、単位が出ない特別クラスを学生と教師の空いた時間に行ったこともあった。そのため、「模擬ツアー」が終わってからも、日本語を勉強する機会を設けてもいいのではないかという意見が出た。

（2）時期

雨季は、雨が突然降るため、観光に支障をきたす恐れがある。また、暑季は暑過ぎるだけでなく、学期休みに入り学生を集め難くなる、また日本人協力者も日本に帰国したりなど、募るのが難しくなる。これらの意見をふまえると、一番観光に適している時期は乾季である。

（3）教科書

「模擬ツアー」は、当校オリジナル教科書『観光日本語』を使用して行う。この教科書は、観光学科の学生のレベルに合わせて、習った文型を中心に作られており、新しい文型はほとんど提出されていない。そのため、学習時期を早めても、問題はないという意見が多かった。

（4）学生の日本語能力

1学期早めても、『観光日本語』の内容を勉強するには、問題がないだろうという意見があったが、日常会話などの点に、影響が出る可能性があるという意見も出た。

（1）～（4）の点を踏まえ、「模擬ツアー」実施科目を、2004 年度は「観光日本語２」の科目で行うのではなく、1 学期早い「観光日本語１」で行うことになった。実施時期については、学生の様子を見てから、もう一度考えることになった。

3.1.2 学習進度

2003 年度の学生は「基礎日本語１」から「観光日本語１」の科目で、『みんなの日本語』第 36 課までを学習し、「模擬ツアー」に臨んだ。そこで、2004 年度は、『みんなの日本語』を何課まで学習すべきかを検討した。「模擬ツアー」までの学習期間が少なくなるので、当然教える内容も変更しなければならないのだが、2004 年度は 2003 年度の学生と比較して実施時期を検討したいと考えたため、第 36 課まで学習させた方が望ましいという結論に至った。2004 年度の学生は、「基礎日本語１」から「日本語会話１」で『みんなの日本語』第 22 課までを学習していたので、「日本語会話２」では、『みんなの日本語』第 23 課～第 36 課までの文型を選択して教えることになった。文型の選択は、「模擬ツアー」を意識して行った。

表３：「日本語会話２」で教えた文型一覧

※23 課～29 課まで、すべて導入。30 課以降、必要と思われる文型を選定した。

提出課	教えた文型
30 課	Ｖて形おきます
31 課	意向形 意向形と思っています
32 課	Ｖた形／Ｖない形ない｝ほうがいいです ～かもしれません
33 課	～と書いてあります／読みます ＸはＹという意味です ＊禁止形、命令形　未導入
34 課	Ｖ1 た形／Ｎの｝あとで、Ｖ2

	V1 て形／V1 ない形ないで、} V2
35 課	条件形 V1 条件形ば／いAければ／なA、Nなら、～
36 課	V1 辞書形／V1 ない形ない} ように、V2 V1 辞書形ように／V1 ない形なく} なります

3.1.3 教授内容、方法の見直し

2003 年度は『観光日本語』の内容を１学期半かけて教えたが、2004 年度は「模擬ツアー」実施時期が早まったことで、「模擬ツアー」までの授業時間数が減り、『観光日本語』の内容を１学期間で教えなければならなくなった。そのため、教授内容、方法を再考する必要性を感じ、見直すことにした。

（1）「観光日本語１」の授業計画の見直し

タイ人教師が文法２コマを教えたのち、日本人教師が同じ課の会話部分を２コマ教えるという形態で授業を行う。週１回４コマ連続授業である。筆者は、時間短縮のために、全課を暗記のみの課と、お客様とのやりとりがある課の２つに分け、教え方を変えることにした。暗記のみの課（ガイド、添乗員のセリフのみ）は、ほとんど授業内では扱わず、教師のところに暗記テストに来るように指示し、お客様とのやりとりがある課を授業で大きく扱うように授業計画を立て直した。教える順序は、2003 年度と同様、教科書の提出課順にすることにした。

また、2003 年度の反省より、日常会話の充実の必要性を痛感し、2004 年度は授業の中でも、日常会話に生かせる会話練習を出来るだけ取り入れることにした。上述した暗記のみの課では、時間のゆとりが出来るため、課の内容と関連付けて自作プリントを作成した。自作プリントは、日本人との日常会話を楽しめるように意識して作成した。

（2）ツアー予約タスク練習の改善

2003 年度の反省では、日本人協力者から「ツアーの予約表記入が出来ない学生が多かった」、「ボードに誤字脱字が多い」、「ボードの PR 発表が長い」など、練習、準備不足を指摘する声が多くあった。そこで、2004 年度は、ツアー予約タスクの練習にあたる第 11 課の学習時間を多めにとることにした。ツアー予約タスクは、ボードでのツアーPR とツアーの予約をとるという２つのタスクからなる。

ツアー予約タスクの準備には、１ヶ月の期間を設定した。まず、１週目にタイ語でツアーのスケジュールを書いたものをタイ人教師に提出する。タイ人教師は、学生が考えたツアーが実施可能かどうか、ツアーの内容にオリジナリティがあるかどうかをチェックし、返却する。そして２週目はそれを日本語に訳したものを提出し、日本人教師が日本語をチェックし、返却する。３週目に、「模擬ボード発表」を行うため、学生は３週目までに、グループでツアーボードとパンフレ

ットを作成する。「模擬ボード発表」では、教師が学生の発表の日本語の正確さ、発表の仕方、ボードの見易さなどをチェックし、学生にフィードバックする。第４週目は、「模擬ボード発表」で指摘されたことを踏まえて、ボードを書き直す週にするとともに、ツアー予約表の記入の仕方をグループごとに日本人教師がテストを行う。第１週目、第２週目の準備は授業時間外を使用し、第３週目、第４週目は授業時間を使用することにした。

4. 2004年度「カンチャナブリ模擬ツアー」実践報告

4.1 企画概略

4.1.1 日時

2004年２月12日（土）11：30～17：00／２月13日（日）９：00～10：30

週末の方が、日本人協力者が参加しやすいこと、また授業進度との関係から、この日程になった。

4.1.2 参加者

学生（観光学科３年生）　21名（専門：観光業15名、ホテル２名、レストラン４名）

日本人協力者　　７名（全員日本語教師）

当校教師　　３名（タイ人教師１名、日本人教師２名）

日本人協力者は、タイ語がよくわからないという設定にし、学生にもそう伝えた。その設定により、学生は日本語で会話しなければならないという必然性が生まれる。また、日本人協力者には、学生のレベル、ツアーの目的や役割を事前に通知し、理解した上で参加していただいた。

4.1.3 目的

このツアーは、学生に今まで習った日本語を使用する機会を与えることを目的としている。当該学生は、授業以外で日本語を使用する機会はほとんどない。そのため、「模擬ツアー」を通して、日本語使用に対する自信を持ってほしいと考えている。また、簡単な表現ではあるが、将来役に立つ表現を、学生に少しでも多く身につけさせたいという狙いも含まれている。

4.1.4 スケジュール

２月12日（土）（移動は学校のバス）

11：00　カンチャナブリ・バスターミナルでお客様を迎える。

11：20　バスに乗る。

11：30　戦争博物館に着く。

12：15　バスに乗る。

12：30　クウェー川鉄橋に着く。

昼食をとる。鉄橋を渡る。お土産屋で買い物をする。

14：15　鉄橋の前で記念写真を撮る。

14：30　バスに乗る。

15：00　学校に着く。ホテルに着く。

15：10　学内ホテルでの実習。（フロント・ポーター業務）

15：50　ツアー予約タスク。（旅行会社業務）

17：00　１日目ツアー終了。（18：00まで、反省会。教師と日本人協力者のみ。）

２月13日（日）（移動は学校のバス）

９：00　ホテルを出発する。

９：20　連合軍共同墓地に着く。

10：20　バスに乗る。

10：30　カンチャナブリ・バスターミナルで解散する。２日目ツアー終了。

4.1.5　学生の役割

このツアーは、①1日目の観光（カンチャナブリ・バスターミナル集合から学校到着まで）、②学内ホテルでのロールプレイ（チェック・イン、部屋への案内）、③ツアー予約タスク、④２日目の観光（ホテル出発からカンチャナブリ・バスターミナルまで）の主に４つの活動から構成されている。

１人のお客様（日本人協力者）に対し、３名の学生がつき、そのグループ単位で観光する。ホテル業務は、学生全員が行うのではなく、一部の学生のみが行う。学生は、観光場面では添乗員やガイドとして、ホテル場面ではフロントやポーターとして、ツアー予約タスクでは旅行会社員としてそれぞれグループ内で役割分担をして、活動を行う。

（1）添乗員役、ガイド役の学生

添乗員は、行程管理の責任者であり、主に日程、予定の説明、時間の案内をする。一方、ガイドは、各観光地の説明の責任者である。しかし、互いに、責任外のことでも協力し合う。学生は、観光中、全員必ずどちらかの役を負う。

（2）フロント、ポーター役の学生

フロントは、チェックイン業務を担当し、ポーターは部屋までの案内、そして部屋の中の案内の責任者である。2004年度は、ホテル専門の学生２名がフロントを、レストラン専門の学生４名がポーターを務めた。

（3）旅行会社業務

ツアーの紹介、ツアー予約の２つのタスクからなる。ツアー紹介では、各グループ３～５分程度で、事前に作成したツアーボード、パンフレットを見せながら、日本人協力者にツアーPRをする。全グループのPRが終了後、ツアー予約のタスクを行う。これは、日本人協力者へのツアーの詳しい説明、及び日本人協力者からの質問に対する応答、ツアー予約表の記入という流れで活動を行う。活動時間は約50分である。

4.1.6 日本人協力者の役割

（1）観光場面

観光中（1日目、2日目）は、適時自由に学生に質問をしていただく。また、学生から、「これは日本語で何ですか。」というような質問があった場合、答えていただく。

（2）ホテル場面

ホテル宿泊表への記入、宿泊部屋への移動、ポーターへの質問を2人1組で行っていただく。

（3）ツアー予約

各ツアーグループを回り、自由にツアーを予約していただく。「制限時間内であれば、いくつツアーを予約していただいても構わない」という旨をあらかじめ通知する。ツアー予約タスクの最後に、ツアー人気投票の投票をしていただく。（この投票はボーナス点として成績に加える。）

（4）評価

日本人協力者には、当日「ツアーの感想シート」を配布し、そのシートの内容に従って、評価をしていただく。2003 年度と 2004 年度の評価項目、観点はほとんど変わっていない。しかし、2003 年度の「模擬ツアー」の反省で、「ツアーの移動中や歩行中の時間での会話が少ない、出来ない」という日常会話に関する意見が多かった。中には、「説明以外では自分から話しかけてこない」という意見もいくつか出ていた。これらの意見を踏まえ、学生が積極的に話しかけることを狙いとし、(c) の日常会話に関する評価を、2004 年度より新しく加えた。

この「模擬ツアー」の評価は「観光日本語1」の科目全体評価の 30%であり、期末テストの位置づけである。(c)、(d) を日本人協力者の評価とし、5段階評価の総合点を成績に加えた。日本人協力者の評価は、「模擬ツアー」の評価 30%中 20%を占める。

(a) ガイド、添乗員、フロント、ポーターの役割別評価。

これは、学生個別評価である。気付いたことを自由に記述していただいた。

(b) ツアー予約タスクの評価

これはグループの評価である。気付いたことを自由に記述していただいた。

(c) 日常会話に関する評価

これは、学生個別評価である。①積極的に話しかけてきたかどうか、②言いたいことが伝わらなくても諦めず伝えようとしたかどうかという2点について、それぞれ1～5の5段階評価をしていただき、気づいたことがあれば自由記述欄に記入していただいた。

(d) 日本語力に関する評価

これは、学生個別評価である。①積極性（日本語を使って話そうとしているかどうか）、②理解度（お客様の質問を理解し、適切に答えられたかどうか）、③文法的正確さ（助詞や動詞などの正確さ、語彙選択の適切さなど）、④流暢さ（学生の日本語を聞いていて、お客様が理解しやすいかどうか、聞きとりやすいかどうか）という4点について、それぞれ1～5の5段階評価をしてい

ただき、気づいたことがあれば自由記述欄に記入していただいた。

(e) ツアー全体に関する意見、感想

これは、「模擬ツアー」全体の評価である。①学生の評価できる点、②学生の今後の課題、③企画内容、④その他の４点について、意見や感想を自由に記述していただいた。

5. 2004年度「カンチャナブリ模擬ツアー」反省点

5.1 「模擬ツアー」終了後の学生の感想

ツアー終了後、「模擬ツアー」の反省をタイ語で書いて、タイ人教師宛にＥメールで送付することを最終課題とした。その際、良く出来た点、良く出来なかった点、来年度のツアーへの要望の３点について書くように指示した。それらのメールを、タイ人教師に日本語に訳していただいたものの一部を記載する。

5.1.1 良かった点

- 全然お客様の言うことがわからないと思っていたが、思っていたよりずっとお客様の言うことが分かった。
- 自分の日本語が日本人に通じて自信がついた。
- お客様と話せて、楽しかった。
- たくさん日本語が話せた。
- 新しい言葉がたくさんわかった。
- いい経験になった。
- 日本人は、分からない時、易しい言葉に言い換えたりなど、理解しやすいように手助けしてくれた。
- お客様が優しかったので、がんばれた。例えば暑くても、嫌な顔をせず根気良くツアーに参加してくれた。

5.1.2 良くなかった、出来なかった点

- 自分の日本語が通じるか自信がなく、話しかけるのが怖くてなかなか話せなかった。
- 教師以外の日本人と初めて話したので、あまり上手に話せなかった。
- 自分の日本語に自信がなかった。
- 時々、お客様の言うことがわからなかった。
- 正確な文法で話せなかった。
- 日本人が話すことが、勉強したことより難しかった。だから、話せなかった。
- 聞いて理解できるが、日本語で何と答えて言いかわからないことがあった。
- 観光地について詳しい情報を求められたが、答えられなかった。

5.1.3 来年度のツアーへの要望、今後の展望

- また、ツアーをしたい。
- これからも、卒業しても日本語をがんばりたいと思う。
- お客様と話す時間が少ない。もっと時間が欲しい。
- ツアー予約の時間が短い。スケジュールのもっと早い時間にした方がいい。
- 自然を紹介したい。自然の観光地に行ったほうがいい。
- 行く観光地の数が少ない。
- 学生は、このツアーに対して、もっときちんと準備をしたほうがいいと思う。
- 日本人は、学生の悪いところ、出来なかったところばかりに目を向けて評価しないか心配だ。
- お客様の性格によって、評価が厳しかったり厳しくなかったりするのではないか。お客様の評価を成績に加えるのは少ない方がいい。
- グループ内の学生のレベル差があると、話せる学生ばかり話してしまう。
- 自分達でグループを作った方がいい。問題が生じた時、相談しやすい。

5.2 「模擬ツアー」終了後の日本人協力者の評価、コメント

ツアー全体に関する意見、感想を中心に記載する。

5.2.1 学生の評価できる点について

- 勉強時間を考えると、どの学生も頑張っていたと思う。客のことを考えて、タイ語使用の割合が少なかったのはすごいと思う。
- 日本語でしか話が通じない相手と話すのは、とてもプレッシャーになると思うが、よくがんばって話してくれた。
- 気を遣えていて、いい。
- 難しい単語や場所の説明をきちんと覚えていて、すごいと思った。サービス精神や笑顔は満点だった。(たまにやりすぎの時もあったが。)
- 会話を楽しめた。勉強意欲も高く、“新しい言葉”など、どんどん質問して、書き留めていたのがよい。
- 積極性。覚えようとする努力。笑顔。
- ガイドという意識が高く、サービス精神が高かった。笑顔を絶やさない。
- 言葉が通じなくても、体中で説明しようとしている点は評価できる。
- 全然知らない外国人に「○○様で、いらっしゃいますか」と話しかけられる度胸。

5.2.2 学生の今後の課題について

- 客が質問しそうなことをあらかじめ予想しておいて、その答えを準備できていたら、もっとよかったかもしれない。
- 下調べをしっかりとしておいたほうがいい。

- 日本語以前に「観光／ガイド」の知識が足りないと感じることがあった。質問をした時、日本語は理解できていても、答えられないことがあった。
- 常にある問題だが、日常会話。

5.2.3 企画内容について

- 全体的によかった。ツアー予約が楽しかった。
- 時間には余裕があって、ちょうどよかった。
- 時間は長く感じず、気持ちよく終われた。展開がよく、てきぱきしてて良い。
- 墓地が長く感じたが、あとは良かった。
- 共同墓地の時間が少し長かった。でも、この時間を利用して学生とゆっくり話せた。この部分はガイドと客ではなかったかもしれない。でも、この時間は必要だと思う。
- 全体的によかったが、ツアーの申し込みや話を聞く時間はもう少しあったらいい。
- ツアー予約はもう少し時間が欲しかった。他のグループと話す時間は、この時間だけだったので。
- クウェー川鉄橋では少し時間が余った。

2004 年度の「模擬ツアー」では、学生の日本語で話そうという姿勢が、日本人協力者から高く評価されていた。また、積極的に話しかけたり、新しい言葉をメモしたり、学習しようという意識の高さについても、好感を持たれていた。学生の意見にも、「たくさん日本語が話せてよかった」、「日本語に自信が持てた」というような肯定的意見が多かった。学生の意見から、このツアーの目的は達成されたと考えてもよいのではないかと思われる。

5.3 改善案

2004 年度の反省を受け、以下のような今後の課題があることがわかる。その改善案について考えてみる。

5.3.1 「模擬ツアー」実施時期

2004 年度は、試験的に「観光日本語１」の科目で「模擬ツアー」を行ってみた。

2003 年度、2004 年度と２回続けて「模擬ツアー」に参加してくださった日本人協力者（１名）に、学生の日本語能力の点について、2003 年度と 2004 年度の学生の間に開きがあるかどうか尋ねたところ、「2003 年度の学生の方が、日常会話はよくできた印象がある」との答えであった。しかし、「2004 年度の学生の日本語を話そうという姿勢や、伝えようと頑張る様子はさほど 2003 年度と開きがあるようには思えない」ともおっしゃっていた。当校教師としても、1 学期早く「模擬ツアー」を行うことに日本語能力の点で不安を感じていたが、この学期に行っても実施可能であるという印象であった。

この時期に「模擬ツアー」を行うことで、４年生前期の「観光日本語２」の学習に対する動機が高まるかどうかその効果については、2005 年度の「観光日本語２」の授業を実施し、学生の反

応を確認しなければ分からない。その上で、再度実施時期を検討しなければならないと考える。しかし、「観光日本語１」の段階で「模擬ツアー」を行えるということが分かったのは、今回の大きな収穫であったと言えるだろう。

5.3.2 「模擬ツアー」までの下調べの必要性

「質問は理解できるが、答えられない。これは、日本語能力が足りないからではなく、その答え自体を知らないのではないか」という日本人協力者からの指摘があった。この点については、今回は観光地に関するレポートをタイ語で提出させたりする課題を設けたが、今後もこのような取り組みが必要であることを示している。また、「模擬ツアー」で訪れる観光地を事前に一度学生とともに見学しておくという下調べも必要ではないかと考える。本来なら、学生自身が事前に下調べをしておくべきこととも言えるが、授業の一環として下調べを行うのも一案である。

5.3.3 日常会話の向上

日常会話は、毎年問題点としてあげられるが、2004 年度は、日本人協力者からはあまりできないものの、このレベルの学生にしてはよくがんばっていたという肯定的な評価だった。日本語が出来なくても、積極的に話しかけようという姿勢が評価に影響を与えたと考えられる。また、日常会話点を評価に加えたことも、学生の積極性に少し影響を与えたかもしれない。

筆者は、日常会話は、「観光日本語」の科目のみで補える問題ではないと考える。同様の指摘を、星井もしており、「学生の６学期間に及ぶ日本語学習の中でもっと伝達能力をつけることに重点をおいた授業計画を立てる必要がある」（p 131, 星井 1998）と述べている。「模擬ツアー」までの日本語学習の中で、例えば会話練習を観光場面で行ったり、ツアーで使う頻度が高い文型は時間をかけて教える、聞き返し表現などのコミュニケーションストラテジーも早い段階から継続的に授業に取り入れるなどを行うことで、日常会話能力が伸びる可能性があると考える。このことから、観光学科の日本語コース全体のシラバスの再検討の必要性を感じる。

5.3.4 時間配分

日本人協力者、学生の両者から、「ツアー予約タスクの時間が少ない」という意見が多く出た。日本人協力者は、７グループ中平均３つのグループしか回れなかったようだ。「この時間をもっと長くして、ゆっくり全部のツアーの説明が聞けるようにしてほしい」との要望が高かった。また、学生は、準備段階を 2004 年度は１ヶ月かけて取り組んできたにも関わらず、当日のタスクの時間が短く、約３名の日本人協力者との交流で終わってしまったことがこのタスクの達成感を得られなかったという気持ちにつながり、このような意見が多く出たのだと考えられる。

そこで、今回のスケジュールを見直してみた。まず、終了時間だが、１日目のツアーの終了時間である 17：00 は学生の帰宅時間を考慮すると繰り下げることはできない。次に活動の時間の見直しをした。2004 年度は、クウェー川鉄橋の見学の時間が長いとの声があったので、この時間を 30 分ぐらい繰り上げて、ツアー予約の時間を延ばしてみるといいのではないかと思う。

5.3.5 日本人協力者の評価

「模擬ツアー」当日では、当校教師が１つ１つのグループを回っての学生の個別評価が不可能なため、日本人協力者の評価の配点比率が高い。学生の反省の中に、「日本人の性格によって評価の厳しさが異なるのではないか」や「学生の出来ない点ばかりが目に付いて、公平な評価ができないのではないか」というような意見が 2004 年度も複数あった。

日本人協力者の評価のうち、日本語能力（20 点）、日常会話（10 点）の２点は数値化し、成績に加えた。評価結果を検討したところ、日本語能力に関する評価は、当校教師の学生に対する評価と大きな差異がなかった。積極性に関しては、当校教師の印象とは異なる評価結果が得られた学生もいた。今後も、日本人協力者の評価を成績に加えるのであれば、日本語教師が一番適当であると筆者は考える。

6. おわりに

この「模擬ツアー」は、学生にとって貴重な経験になるとともに、今までの日本語学習を振り返り見つめ直すいい機会であると言える。筆者も、学生のツアーまでの取り組みや、ツアー当日の生き生きと話す姿や笑顔を見て、「模擬ツアー」の必要性を再確認した。しかし、改善していかなければならない課題もまだまだ多いのが現状である。今後も、参加協力をしてくださる日本人の皆さんからの意見や学生の意見などを取り入れ、「模擬ツアー」までの取り組みやツアー内容をよりよくしていきたいと考えている。また、観光学科の日本語コース全体のシラバスについても検討していきたい。学生が日本語学習を経て、少しでも何かを得てくれたなら幸いである。

参考文献

石川薫（1999）「挑戦！１日日本語ガイド！－RI アユタヤ校における会話の授業の実践報告－」、『国際交流基金バンコック日本語センター紀要』第２号、国際交流基金 25－36

野阪智恵子（2004）「観光学科４年生の一日ガイド実践報告」、『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第１号、国際交流基金 143－147

Sakesit Paksee・Pattarasupar Siengyai・星井直子（1988）「日本人協力者を招いての『カンチャナブリ模擬ツアー』実践報告」、『国際交流基金バンコック日本語センター紀要』第１号、国際交流基金 121－132